

献呈の辞

経済学部准教授 水村典弘

安藤陽先生は、2014年3月末をもって定年を迎えられました。

安藤先生は、立教大学経済学部を1971年3月に卒業され、直ちに同大学院経済学研究科に進まれたのち、1982年4月に埼玉大学経済学部に着任されました。それ以来、今日に至るまで、実に32年もの長きにわたって、一貫して本学部の教育と研究の発展のために尽力してこられました。

先生は、本学部で公企業論・企業論・演習などをご担当になるとともに、大学院経済科学研究科修士課程（現在の博士前期課程）ではその開設時から現代公企業論をご担当になられています。誠実で温厚なお人柄と丁寧な語り口で知られる先生の講義は、「学生に講義の内容を十分に理解してほしい」という先生の想いが学生に伝わるのでしょうか、本学で最大の収容人数を擁する大教室を常に満席にしています。

先生は、立教大学経済学部ならびに同大学院経済学研究科において経営学を専攻され、「法人所有と株式会社支配」に関する研究を基点としてその研究活動を開始されました。折しも当時の日本では、第一次オイルショックを契機に高度経済成長期の終焉が囁かれ、戦後日本の経済発展に大きな役割を果たした「三公社五現業」「特殊法人」の見直しが強く求められていました。そのためもあったのでしょうか、大きな時代のうねりのなかで変化を余儀なくされる公企業の動向に先生は深い関心を寄せられ、当時の状況を知る上において貴重な研究業績を数多く残されています。また、三公社の「民営化」にも目を向けられ、かつての日本国有鉄道の「分割・民営化」によって成立した「JR体制」の課題にも鋭く切り込まれています。

先生の御論稿を拝読して改めて気付かされたことがあります。それは、民営化という言葉を含弧で囲まれ、公企業民営化＝私企業化ではないと言明されている点です。だからこそ、先生は、当時のJR各社で行われていた経営合理化に警鐘を鳴らし、安全輸送の確保と向上という「鉄道事業者としての原点」に立ち戻ることの重要性を絶えず説かれるのです。「鉄道利用者の安全は、鉄道の現場で働く労働者の職場環境を前提に成り立っている」との視座に立つ先生の一貫した主張は、日本の鉄道輸送における安全神話を崩壊させる重大事故の背後要因を構造化して説明する際に極めて示唆的です。このような揺るぎない信念と冷静な分析視覚を持たれる先生の御活躍の場は実社会へと広がり、交通運輸政策研究会の会長（2011年4月～現在）として、交通運輸産業の労働組合との連携で交通運輸政策の研究に今も取り組まれています。

本学在籍中に、先生は、御自身の専攻である「公企業論」「第三セクター論」の深化とその成果を実社会に活かすべく学術研究の振興や地域への貢献で重要な役割を担われただけでなく、経営学科長として学科の教育および運営にも尽力されました。また、埼玉大学留学生センター長、埼玉大学国際交流セン

ター副センター長、埼玉大学国際交流センター長を務められるなど、本学の国際連携活動の推進にも多くの功績を残されてきています。とりわけ国家戦略としての留学生政策やグローバル教育強化が強く要請された時期に、本学と海外の大学等との学術交流や学生交流の基盤となる大学間協定や部局間協定の締結に向けて奔走され多くの成果を上げられたことは、本学関係者の誰もが知るところです。

これまで学術研究の向上発達に資する活動を先導され、また本学の教育研究活動および国際化に資する活動に多くの功績を上げられてきた先生が本学を去られることに惜別の念を禁じ得ません。

先生には、心からの謝意を表させていただくとともに、御退職後も引き続き御健勝であられることを念願して献呈の辞とさせていただきます。長い間、本当にありがとうございました。